

## 宗門の新體制と身延への希望と期待

龍口 富川 日 馨

先年私が宗務總監在任當時、劃期的大案たる祖廟中心制度は宗會の協賛を経て確立し、こゝに先師先聖苦心の努力は實現せられたのであるが、然しいまだ基礎的事項が確立したといふだけであつて、宗門全體の機構なり體制なりが悉く祖廟中心的に完成したといふのではない。

惟ふに宗祖は滅に臨み、嚴に輪次守塔を御遺命遊ばされて祖廟中心の大本をお定めになつたのであるが、この制は遺憾ながら故あつて間もなく破れ、更に六祖の分張から先師方の教縁發展に伴ひ、勢ひの赴くところ、宗門は本末制度を基準として發達するに至つた。そして多年の間には各山の對立や確執があり、一祖師の宗門でありながら、おの／＼門末を擁して各山は恰も獨立教團の觀をさへなすに至つた。これは宗門發展の過程に於て餘儀

ない現象とは言へ、宗門本來の正しい姿とは言へない。

そこで明治の初年、國家庶政の一新と共に、宗門もまた身延を中心として一元化すべく、廢本合末論や身延中心論が叫ばれ、果ては血を見るが如き紛争をさへ惹起したのであるが、本末關係に對する因襲の深き、遂にこれを實現するに至らなかつた。然るに時なる哉、先年祖廟中心制度の確立を見、今また國家の新體制運動は宗門多年の因襲をもゆるがし、遂に今般、宗門新體制準備委員會に於て、前年の廢本合末の議が、「本山の解體、末寺の解放」といふ形式に於て、しかも本山側からの動議により、和氣藹々の裡に全員賛同し、その後間もなくの本山會議に於てこれを明確に議決するに至つた。しかもそればかりでなく、八派の合同歸一といふ大問題までが眞劍

に各派要人の中に擡頭し、今やこれを一舉に實現せんと屢次の會合をなす運びとまでなつた。まことに時代の大きな推進力の賜物である。國家の爲にも宗門の爲にもこれ以上の悦びはない。

然しこゝで大いに慎重に考慮すべきは、從來の本末間に於ける多年の情誼を殺すことなく、いかに新しい機構を完成して行くかといふ事である。即ち、末寺を宗門に解放することによつて一般の寺院は本山の隸屬から離れることになるのであるが、然し數百年來持續し來つた本末の情誼は、永い歴史の中に涵養され來つたものであつて、たとへ解放されて本末の關係はなくなつても、何等かの形に於てこの情誼と歳史とは存續させたいと思ふ。と言つて、舊來の本末關係に執着を持ち、依然として新體制に即應同化できないやうな事であつては何にもならない。情誼は情誼として存し、歴史は歴史として尊びながら、しかも飽くまで新體制に即應した新機構を完成し以て渾然一體たる宗門を作らなければならない。

#### 宗門の新體制と身延への希望と期待

私が身延に期待し希望するところもまたこの點である。身延は身延の身延ではない。況や身延門末の身延ではない。祖師の身延であり、宗門の身延である。身延の宗門經營といふことも、實際問題としてはまだ未解決である。身延の宗門への解放といふことも、これまた實際問題としてはまだ研究の餘地は充分に有るであらう。今や本山は解體して末寺を宗門に解放することとなり、身延も亦然りであると同時に、他方には八派の合同問題もある。大宗門の大神延を作つて行くといふことは、實にこれらの重大案件と言はねばならない。身延山當局の充分なる研究と考慮とを希望する次第である。

更に經營施設の實際問題について一言するならば、現在の身延は必ずしも一宗の總本山として規模が小さいとは言はない。宗祖留魂の山として、山容水態おのづから秀麗、しかも先師の苦心經營によつて、堂塔の莊嚴、殖林の事業等、申分がないと言つてよい。然し將來の大宗門を豫想した時には必ずしもその規模は大にして、施設

も決して充分だとは言へない。

たとへば、財政的にもつと發展し、大身延としての資源を豊富にする必要があらう。祖廟擴張の事業はすでに着々として進められてゐるが、それと同時に支院の布置等も考慮し、山容を整美することも必要であらう。大身延町の都市計畫も一考する必要があらう。更に遠大の計畫としては、戒壇建立の準備をもう今からそろ／＼始めて置くのも必要であらう。とにかく將來の大宗門を豫想し、それにふさはしい大身延を豫想して總てを計畫せねばならぬ、所謂身延は末法萬年の闇を照破すべき光の

## 大火所焼時

◇ は し が き

猛烈に忙しい私が、今日日本山に上り學院の校舎が大層美しく

根元である。大宗門の身延どころではない。日本の身延であり、東亞の身延であり、八紘一字の皇謨と四海歸妙の宗謨とが實現し、事壇建立の曉には實にこれ世界の身延である。今やその曙光は正に輝きそめたのである。今この新體制樹立の機運こそ、身延もまた新體制を樹立すべき好機で、この機會に須らく遠大なる末法萬年の計畫大身延確立の計畫を樹てゝ頂きたいと思ふ。

宗門新體制の樹立せんとするに方り、ちやうど「棲神」同人より、學院創立三十周年記念號に寄稿を求められたので聊か所懐の一端を述べた次第である。

綱 脇 龍 妙

見違へる様に立派に修繕せられたと聞いたので、行つて見ると如何にも其の通り、實に麗しく全然建て更へられたかの様に變つてゐる。けれども好く観ると本館は元の儘のが、實に上手に